

地理学 研究の動向とその変化

——1980年代のIGUと日本の学会発表の比較からの考察——

鈴木富志郎*・今井 英文**・藤田 昭治**・吉田 幸嗣**

I. はじめに——研究の目的と方法

1980年代は、世界の社会状況をみても、社会主義体制に対する見直し、一国内での民族間対立の激化、環境問題の顕在化など、大きなうねりと変化がみられた年代であった。また、地理学界にあっても、いわゆる計量“革命”が研究手段として定着し、その使用が一般化されていく一方、人文主義地理学の勃興や地理情報システムの開発、あるいは世界的に関心を集めつつあった環境問題の追及などの新たな動きが見られるようになった。

そこで、この時期の研究動向を検討することは、今後の地理学の方向性を見定めるうえで有意義であると考えられるので、本稿では世界の地理学界と日本のそれとを比較しながら、1980年代の地理学研究の動向について若干の考察を試みてみたい。

ところで研究の動向を明らかにするには、2つの方法があると考えられる。その1つは分野ごとに論文を紹介し、それによって傾向を把握してゆく定性的な方法であり、もう1つはなんらかの機関に発表された研究(論文)の数を指標にして、研究者の関心の度合を推察する定量的な方法である。前者は、『人文

地理』誌に掲載される「学会展望」がその好例で、研究内容を衆知せしめられるという長所をもつが、一方では収集能力に自ずと限界があり、かつ他の分野の研究動向と客観的な比較がおこなにくいという弱点をもっている。後者は、詳細な研究内容にこそ踏みこめないものの、適確な発表機関を母集団にとり上げるならば、他分野のみならず他国の研究成果であろうとも、容易に比較しうるという利点がある。これらから考えると、いわゆるレフリーつきの学術雑誌に掲載された論文とその数をとり上げるのが最もふさわしいのであるが、世界の全地理学者に共通する学術雑誌は存在せず、さりとて世界中の地理学関係の雑誌に目を通すことは不可能である。そこで本稿では、世界の地理学者に機会があたえられているIGU(国際地理学会)の大会での発表件数をもって世界の地理学界の研究動向をあらわす指標とし、日本の地理学界のそれはAJG(日本地理学会)大会での発表件数をもって代表させ、比較することとした。

II. 研究分野の分類基準と文献目録 にみる変化

国際地理学会および日本地理学会における発表の比較をおこなうためには、両者に共通

* 立命館大学文学部

** 立命館大学大学院

する分類基準が必要となる。地理学に関する諸分野の業績はいくつかの文献目録によって分類されているが、なかでも人文地理学会が編集・刊行している「地理学文献目録」は、地理学および関連諸分野の文献を広範囲にわたって収録しており、地理学界における体系をもちいていることから、本稿での分類基準とするにふさわしいものと思われる。

1952年以来5年ごとに編集・刊行されている「地理学文献目録」は、その編集方針は基本的に踏襲されており、分類方法もほぼ前集に準じるという継続性をもっている。そこで本稿では、「地理学文献目録」第8集による分類（第1表）を基準として分析をおこなうが、ここではその前提として第1集以降の分類項目の変化と、第7集（1984年刊行）および第9集（1993年刊行）における分類項目別の論文数の変化をも考察しておきたい。

「地理学文献目録」の分類は、大分類とそれをいくつかに分つ小分類、さらに必要に応

じて細分類をもうけるという構成になっている。大分類は今後とも採用するはずの恒久的なもの、小分類は目録の活用を容易にするためのもの、というのが第1集の方針で、以降それがうけつがれてきているので、大分類の変更は少なく、大分類の変更は地理学の動向の変化とみることもできよう。そのいくつかの例をあげると、第1集の「地球・地質・地形・地震」は、第2集で「地球」「地質」「地形」に分かれ、第8集では「地球」「地質」のような地理学固有の分野以外の項目は廃止され、同時に「海洋」「陸水」は「水文」に統合されるなど、自然地理学系の大項目の整理・改革が行われた。

一方、第7集で「地図・地名」が分かれたのは、地理学の対象として、地図や地名の研究が盛んになってきたためであろうし、「環境認識・知覚地図」（後に知覚・行動）が新設されたのも注目される。また、第1集で「経済」としてまとめられていた項目が、そ

第1表 地理学の大分類——地理学文献目録第8集による分野わけ

番号	内容項目	番号	内容項目
1	地理学総論	16	水産業
2	地理学史	17	資源
3	地図・古地図	18	工業
4	地形	19	地域計画・地域開発
5	気候	20	商業・貿易・金融
6	水文	21	交通・観光
7	その他の自然地理学	22	政治・社会
8	災害・公害	23	民族・文化
9	人口	24	知覚・行動
10	村落	25	歴史地理
11	都市	26	地名
12	経済地理	27	地誌
13	農業	28	地理教育
14	牧畜業	29	紀行・随筆
15	林業		

れぞれ独立した大項目となるが、そのなかで、後に「地域計画・地域開発」となる項目が「総合開発・自然改造」とされていたのも時代を反映していたといえよう。

そして、第5集で「集落」が「村落」と「都市」に分割され、新たに「貿易」と「観光」がそれぞれ「商業」と「交通」の項目に組み込まれた。この変化はいわゆる「戦後」から脱却して高度経済成長へと変った社会の流れと対応しているし、第9集になると、近年の国際的な傾向として対応して「環境問題」が登場している。

第7集と第9集とでは、項目の分割・統合や新設があり、収録論文数も第7集が約12,500編、第9集が約5,500編と2倍以上の差があって、単純には比較できないが、10年間の推移から一定の傾向をみることはできるであろう。

第9集では、「都市」「歴史地理」「地形」の3項目で26.8%を占めているが、「歴史地理」のみが比率を減少させているものの、これらは第7集でも上位にランクされており、現在の日本の地理学研究の主流をなしているといえよう。「文化」「地理教育」「地図・古地図」は、それぞれ5%台に急激に論文数が増加した項目である。これらは文化事象にたいする地理学面からのアプローチの関心のたかまり、社会科科目の再編成からくる地理教育にたいする問題提起、地図や絵図への新しい分析・研究、などの反映と考えられる。

反対に、「水文」(「陸水」「海洋」)、「災害」、「農業」などは、論文数の比率においてほぼ半数に減少した項目で、第1次産業やルーラル(村落)研究も減少の傾向にある。

恒久的であることを目指して設定された大

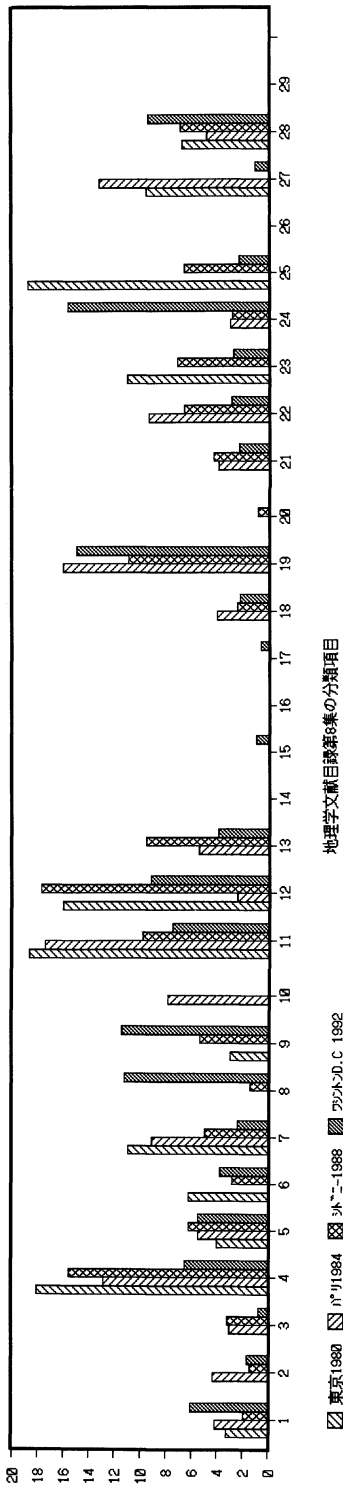
分類項目も、時代的背景をうけて少しずつ変化している。たとえば、第3集から第4集にかけては高度経済成長に対応した項目変化があったし、第8集になると自然地理学系の項目整理がなされ、近年になると文化的社会的な分類がひろがってきている。いずれにせよ、文献目録からみるかぎりでは、1980年代は「都市」「歴史地理」「地形」を中心に推移し、「文化」や「地理教育」の割合がたかまる一方、第1次産業やルーラル系統の研究の衰退がみられた。ただ、この分析・検討は文献目録に収録された論文数だけからのものであることを、再度明らかにしておきたい。

Ⅲ. IGU 大会の発表題目からの分析

1980年代から1990年代初めにかけて、IGUは東京(1980)、パリ(1984)、シドニー(1988)、ワシントン D.C. (1992)と、4回の大会を開催した。各大会はそれぞれ全体テーマを設定するが、セッションごとの一般発表(自由発表)をも募集しており、本項でとり上げるのは一般発表の題目からの分析である。

東京大会の全体テーマは“日本文化”であった。急激に西欧的な近代化を成し遂げた一方、伝統的な文化を色濃く残しているだけに、外国人のイメージを刺激するには格好のテーマであったといえる。

また、東京大会においては、日本で通常的に用いられている地理学の分類にもとづいて12セッションが設定され、404名が発表した(第1図参照)。発表者が最も多かったのは地形のセッションで、このほか気候、水文、その他をふくめて自然地理学系が、全体の約



第1図 IGU大会の分野別発表件数の年次別比較
(分野の番号は第1表を参照のこと)

4割を占めた。この傾向は日本地理学会で、自然地理学研究者が多いことに関係があろう。自然地理学分野は、発表が多い為、テーマが細分化された。第2位は歴史地理学で、これも日本では独立した分野であることをあらわしている。一方、農業、水産業、工業など産業関連分野は、経済地理学に一括されている。

全体的に、東京大会ではセッションが大きく集約された為に、セッションのテーマ(タイトル)から、地理学者が関心をいただいていた事柄を知ることは困難であった。

パリ大会では“アルプス”を全体テーマとし、36セッションで769名が発表した。発表が最も多かったのは地形、第2位は都市、第3位地域計画・地域開発の順であった。パリ大会において地形(気候や氷河地形を含む)の発表が多かったのは全体テーマに即したフィールドが近くにあることもその一因であろう。前回の東京大会で第2位であった歴史地理学は、分類上該当がない。これは、歴史地理学が村落などの分野に含まれているためである。

各セッションのテーマを見ると、地理学の分野名を直接のテーマとするのではなく、具体的な発表内容が想像されるようなネーミング、たとえば“山地における基本的生態系と開発”などのように、わかりやすい名称がつけられているのは、地理学を一般社会へアピールする必要性が高まってきたためとも考えられる。

その点で注目されるのが発表の第3位に地域計画・地域開発があがってきたことである。これは地理学が、これまでの研究成果をふまえて、その応用へ積極的に参加しようとするあらわれであり、研究の社会への還元として

評価されよう。また、地理学研究の技術の一つとしてのリモートセンシングやコンピューターによるデータベースの問題が、それぞれ独立したセッションとしてとり上げられるようになった。

シドニー大会では、78のセッションにおいて565名が発表した。発表は地形、次いで経済地理、そして地域計画・地域開発の順に多かった。オーストラリアで地形学が多いのは、珊瑚礁などの海岸地形研究がさかんな為と思われる。

各セッションのテーマ設定は、“経済地理学—ツーリズムとレクリエーション”のように、まず地理学の分野名を記し、副題として発表内容を明示している。体系的でありながら、かつ内容がわかりやすくなっていた。セッションのテーマでは、前大会では2ヶ所にすぎなかった“環境”の語句が今次大会では6カ所に増加しており、“環境マネジメント”というセッション名称からもわかるように、応用をも含めた関心の高まりを示している。

従来から地理学が得意とする実態把握およびその技術としてのリモートセンシングがセッションテーマとして定着し、また大量の情報処理とそれによる地図表現を試みる地理情報システム（GIS）が新しく登場した。これらは、地理学にとって、これからの応用を考える場合に無視出来ない技術・道具となると思われる。

ワシントン D.C. での大会の全体テーマは“Geography is Discovery”で、これはコロンブスの新大陸発見500周年記念にちなむものであった。この大会はセッション数は236、発表者988名という大規模なものであったが、

各セッションは地理学のこれまでの体系によらず、提出された論文のうちから類似のものを4編前後集めてひとつのグループとしたので、セッションが非常に細分化され、それに恣意的とさえおもわれるような名称をつけたので、これまでのように地理学文献目録の分類基準にあてはめることは困難であった。そこで、セッションの分類にあたっては、まず主催者側が設定した Technical Program Key による分類を利用した上で、地理学文献目録第8集にもとづく再分類をおこなった。こうして分類してみると、発表は人口、災害ならびに公害、知覚・行動の順に多く、これまでの大会において多数を占めた地形の報告が少なかったのは、地形学は地理学とは異なった学問分野であるとするアメリカ合衆国の体系によるものであろう。

テーマを詳しく見ると、人間活動による環境へのインパクトを取り上げたものが多く、“環境”という語がもちいられているセッションは40カ所余りに達しており、環境への関心の急激な高まりを表している。しかしながら、“環境”とは何か、の議論のないままに語だけが先行しているように思われ、“環境”そのものに対する今後の議論が待たれる。

また、技術としての地理情報システム（GIS）もますますさかんになったが、地理情報システムそのものの議論ではなく、環境モニタリング、地域計画などへの応用に関するセッションが設定されている。

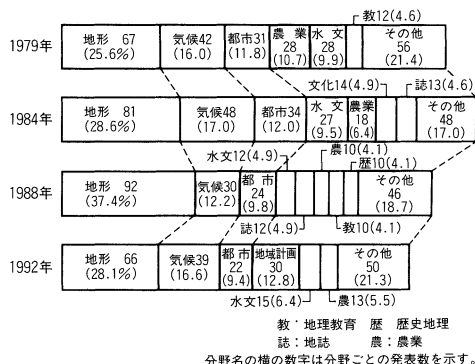
これらと同時に、従来の伝統的な枠組みにとらわれず、人種問題、エイズ等の健康問題など、開催国アメリカ合衆国が直面している課題に関するセッションがもうけられていたのにも注目される。

Ⅳ. 日本地理学会からの分析

前節では IGU の大会における発表を分類基準にあてはめて分析したが、それとの比較のために、日本で最大の地理学研究者の集まりである日本地理学会大会における発表をとり上げて考察してみたい。日本地理学会の大会は、原則として年間2回開催されている。ここでは春と秋の大会の予稿集を資料とし、年次に関しては IGU の開催年にあわせたが、1980年は IGU が東京で開かれたため、代わりに1979年の大会のそれを用いた。

1979年の分野別研究動向として(第2図参照)、次の2点が指摘できる。第1には、地形、気候、都市、農業、水文の5分野が寡占状態にあることであり、この5分野で全発表数の75%が占められている。このうち、地形が25.6%と最も多く、他の4分野はほぼ同じような比率をもって並立している。第2に、1979年当時は農業の研究がさかんであったことで、green revolution(緑の革命)がさげばれた時代でもあった。

1984年になると、農業分野の研究はやや減少したが、地形、気候、都市、水文の4分野



第2図 AJG大会の分野別発表件数の年次別変化
(日本地理学会予稿集より作成)

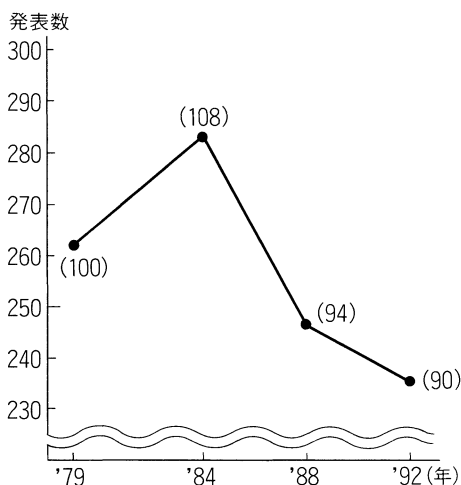
での研究は依然として活発におこなわれていた。この年の特徴は、これまで少なかった地誌の研究が増加してきたことにある。それは当時のわが国における社会的風潮として国際化が提唱されはじめ、それをうけて外国地誌研究が増えたためであろう。

1988年の特徴は、地形研究の隆盛をあげることができる。前年次に比べて、発表数で11件、比率にして約10%増加している。この年の秋季大会で変動地形学のシンポジウムが行われたことを考えあわせれば、その傾向はより明らかに理解されよう。

1992年になると、地域開発分野の研究が一挙に活発してきた。かかる分野の研究発表数はこれまでの大会においてはほとんどゼロであったが、1992年には全発表数の16.6%を占め、発表数の多い方から3番目にランクされるにいたった。その内容を細分化してみると、純粋な意味での地域開発が17件、環境保全に関するものが13件に分けうる。また、この年の秋季大会において、環境保全および地域政策に関するシンポジウムが開かれたことも大きな意味があろう。

1992年の IGU の大会でも環境をテーマとする発表が多かったように、近年は全地球的に環境問題がクローズアップされ、その解決に向けてさまざまな試みがなされている。環境問題をふくむ地域開発分野の研究の進展は、社会で関心の高まっている事柄に対する地理学からのアプローチの反映であり、地域を対象とする地理学にとって重要な課題であろう。

ところで、1979年から1992年までの日本地理学会大会での発表数は、1984年が283件と前回を上回ったものの、その後次第に減少の傾向にある。日本地理学会大会での発表件数



第3図 AJG大会の総発表件数の変化
 ()内は'79を100とした時の値
 (日本地理学会予稿集より作成)

は、月例会や研究委員会あるいは他の学会との関係で変化することが考えられるから、一概には断言できないが、大会発表という一面に限って言えば、やや停滞ぎみにあるといえるのではないだろうか(第3図)。

V. 1980年代の地理学研究の流れ

これまで、1980年代という時代に、地理学研究がどのように変化してきたかを、国際地理学会(IGU)と日本地理学会(AJG)の両者の大会での発表件数とその題目から、地理学文献目録第8集の分類基準に当てはめ、比較考察してきた。

1980~92年の4回のIGUの大会でのセッションを分野別の発表者数の比率のを記したのが、第1図であり、AJGの大会でのそれ

が第2図である。つまり、これらの図で常に上位にあることは、地理学での研究者が世界的にもかなり多く、かつ流行に左右されない分野であるといえよう。それからいうと、地形、都市、経済地理、地域計画・地域開発などがそれに該当する分野といえそうであり、日本の場合にはこれに加えて気候、水文分野の研究も多くなっていて、このあたりに地理学における関心とその研究方向がみえるように思われる。

また、1980年代の中ごろからは、リモートセンシングなどの新しい研究技術の開発がすすみ、コンピューターの普及をうけて大量の情報処理がおこなえる地理情報システム(GIS)も登場してきた。さらに1980年代の終わりごろからは両大会とも“環境(Environment, Environmental)”という語が多用されているように、時代に即した問題や各国の関心が地理学の研究にも反映されていることも事実である。IGUの大会では開催国の地理学会の影響をうけて、セッションのユニークな構成や分野を採用することはあるにせよ、世界全体の傾向はあまり大きく変わっていないのではないだろうか。

なお本稿は、1992年後期に、立命館大学大学院で鈴木が担当した地誌学研究Ⅰの演習にもとづくものであり、Ⅰの一部とⅣは今井、Ⅱは藤田、Ⅲは吉田のレポートを主として用いているが、補訂をふくめて文責は鈴木にある。